アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ

霞ヶ浦のサンセット

―アリス・ギア・アイギス外伝―

第四話「惨憺」

《ペンケースを投げるのを堪える》

◆優陽の部屋

振り上げたペンケースを思いっきり床に向けて振り下ろす。
……が、ペンケースをギュッと握ったまま、床にたたき付けるのをなんとか堪えた。

優陽　「ううっ……」

体が脱力し、優陽の膝が崩れ落ちる。
同時に握っていた手の力も失い、ペンケースが床に落ちた。

優陽　「アクトレスは何も悪くない……悪いのはあたし……力がなかっただけ……ううっ……」

膝を付いたまま窓の外に広がる星空を見上げる。

優陽「もう、届かないんだ……」

夜空に向かって右手を伸ばす。

優陽「どんなに頑張っても掴めないんだ……ううっ……」

思いっきりギュッと握っても、その手の中には何もない。
その空虚感を紛らわすように、握った右手を胸にあてて左手で包む。

優陽「ううっ……ううっ……」

頭を床に付け、今にも大声を出してしまいそうな心をグッと抑え付ける。
だけど、その意に反するように目から涙が溢れ落ちた。

優陽　「諦めるしか……ないんだからっ!!」

声にならない声を張り上げる優陽。
長年抱いていた夢を諦めるため、一晩中感情と戦い続けた……

◆教室

月曜日。
1時間目の授業が終わっても、優陽の姿は教室になかった。

澪音　「……優陽、来ないね」
調　「昨日の今日だし、な」

二人は同時にため息をついた。

菜澄那「あ、草野さん、櫻井さん！　ちょっと良いかしら？」

担任の伊藤菜澄那が教室のドアの外から手を振って二人を呼び出す。

澪音「あ、はい！」

席に座っていた澪音と調は立ち上がり、菜澄那のいる廊下へと移動する。
二人がやって来ると菜澄那は往来の邪魔にならないように廊下の隅へと移動し、二人を誘導した。
そしてコソコソと話し出す。
どうやら他人に聞かれたくない話のようだった。

菜澄那「二人には稲葉さんから連絡あった？」

澪音「いえ。何もなくて……」

菜澄那「そう……学校にも連絡がないのよ」

澪音「えっ、そうなんですか！？」

菜澄那「昨日、何かあったの？」

澪音「あ、えーっと……」

調「ちょっと優陽にとってショッキングな出来事がありまして。私達も心配はしていたのですが」

菜澄那の質問に言いよどんだ澪音をフォローするように、調が事情を説明した。

菜澄那「そう……」

菜澄那は顎に手をあてて、『ショッキングな出来事』について考えた。もちろんその内容を知りたくはあるのだが、ここは彼女達から話してくれるタイミングを待つことにした。

菜澄那　「何か稲葉さんから連絡があったら、私にも教えてもらえるかしら？」

澪音　「は、はい。わかりました」

菜澄那がその場から立ち去ると、途端に澪音が慌て出す。

澪音　「どうしよう、しべ……学校にも連絡ないって……」

調　「落ち着け、澪音。大丈夫。優陽はああ見えて強い娘だ。今はそっとしておいてやろう」

調は今にも学校を飛び出して探しに行こうとする澪音の両肩をガシッと掴み、目を見て語った。

澪音　「……うん」

澪音は少し落ち着きを取り戻し、頷いた。

澪音「メッセージだけ、送ってみる……」

調「あぁ、それがいい」

調はニコッと笑って澪音に応えた。

しかし、外見こそ冷静さを保っていた調だったが、内心はかなり動揺していた。

調（……優陽。せめて私達には連絡くれよ……）

◆書店

その頃、優陽は通学路の途中にある書店にいた。

書店員　「あら、優陽ちゃん。学校はいいの？」

開店してからすぐに姿を現した常連客の優陽に、書店員の老婆はレジに座ったまま声を掛けた。

優陽　「ちょっと具合が悪くて。これから学校に行くところなんです」

書店員　「そうだったの。体は大事にしないとね」

優陽　「ですね！　でも、もう大丈夫です！」

ニコッと笑いながら、優陽は一冊の本を手に取った。

優陽　「これ、ください！」

書店員　「いつもの本だね。袋入れる？」

優陽　「あ、カバンに入れるのでこのままで大丈夫！」

お金を支払うと、早々に購入した本をカバンにしまった。

書店員　「いつもありがとね」

優陽はニコッと微笑むと、手を振りながら店を出た。

◆霞ヶ浦

学校を通り過ぎ、霞ヶ浦まで足を伸ばした優陽。
とにかく今は一人になりたかった。
カバンの中に手を伸ばすと、先ほど購入した本を取り出した。

優陽　（……あたし、どうしてこの本を読んでいるんだろ？　もう、アクトレ

スになれないのに……）

昨日までこの情報誌が発売される今日を楽しみにしていた。
しかし今日になり、複雑な想いを抱えながらも手に取ってしまった。
希望が打ち砕かれても、その欠片にすがりたいだけなのかもしれない。
そんな風に自分を納得させながらペラペラとページをめくる。
だけど、優陽を満足させるような記事はどこにもなかった。

優陽（諦めなきゃいけないのに……）

優陽は情報誌をめくりながらも、頭は別のことを考えていた。

優陽（……今はとにかく、映画を完成させないと……）

自分が望んだこと。

言い出しっぺ。
それに巻き込まれた部員達。

優陽（分かってる……分かってるけど……ううっ……）

責任感と失望感に挟まれて、優陽は前を向く勇気を持てなかった。
ポタポタとアクトレスの情報誌が涙で濡れていく……
その時、ピコンという着信音と共に、優陽のスマホにメッセージが届いた。

澪音『菜澄那ちゃん、心配してたよ？　今日は学校に来る？』

澪音からだった。

優陽　『今日は休むよ。ゴメン』

手を震わせながら、たった一言だけ返信する。

澪音　『分かった。菜澄那ちゃんには伝えておくね』

澪音のメッセージが暖かい。
だけどその暖かさは、余計に優陽を苦しめていた。

◆教室

次の日の朝。

優陽　「おはよう、澪音ちゃん、しべちゃん」

澪音「優陽！」
調「おはよう」

手を上げながら勢いよく教室に姿を現した優陽。
そんないつもの元気な彼女の姿を見て、澪音と調は心底ホッとしていた。

優陽「昨日はゴメンね。心配かけちゃって」
澪音「ううん、いいよ。気持ちの整理が付くまで、撮影もしばらくお休みにするからさ」
優陽「え……？」

相当な覚悟を決め、無理やりにでも気持ちを抑え付けようと覚悟してきた学校。
自虐的に自分を痛めつけてもアクトレスへの想いを断ち切ろうとしていただけに、優陽は肩透かしをくらった思いだった。

調　「スケジュールはまだ余裕あるらしいんだ。奥井もヴァイスのモックを
　　創りたいって言ってたし」
優陽「う、うん……分かった」
　　二人が自分に気を遣ってくれるのは当然嬉しいのだが、その一方でこ
　　れも当然のように辛くもあった。

◆霞ヶ浦
　　放課後。
　　優陽はまた一人で湖を眺めに来ていた。
優陽（……二人には気をつかわせちゃったな）

湖畔のベンチで一人座っている優陽。
夕焼けが湖面に撥ねてキラキラと輝いていた。

優陽（いいのかな、本当に……だけど、今は映画のこと忘れたい……）

まるで海のような霞ヶ浦。
目の前には水平線が広がり、その奥には筑波山が薄らと見える。

優陽（でも……このままじゃいられない……）

ついさっきまではもう大丈夫だと思っていた。
だけど、ふとした瞬間にこうして感情が不安定になってしまう。

優陽（ううっ……だけどあたしは……あたしはもう……アクトレスになれな

いんだ……）

◆映画研究部部室

優陽のいない部会。
澪音や調は当然のこと、ほかの部員達も優陽がいない異常さを感じていた。

澪音　「みんな。しばらくの間、撮影は中止するから」
泰介　「なんでだよ！　文化祭に間に合わせるんじゃなかったのかよ！」
澪音　「もちろん間に合わせるつもりだよ。だけど優陽の体調が優れないから」
泰介　「なんだよ、言い出しっぺがコレかよ！」
澪音　「仕方ないでしょ！　優陽は今……」

泰介　「ハン！　アクトレスになれないから傷ついたってか!?　なんだよそれ！」

泰介は例の日の晩に姉の様子がおかしいことに気がつき、何があったのかと尋ねていた。
最初こそ話すのを躊躇っていた澪音だったが、あまりにもしつこい泰介に根負けし、映研メンバーでもあることから事情を話していた。

みちる　「えっ!?　アクトレスになれない……？」

奥井　「…………」

みちるは泰介が言ったことがどういう意味なのか瞬時には理解できなかった。
一方の奥井はその一言で理解していた。

澪音　「仕方ないでしょ！　アンタだって腕を骨折して好きなゲームができなくなったらツライでしょ！」

泰介　「ツレーかもしれないけど、誰にも迷惑かけねーじゃん！　だけどこっちはそうもいかねーだろ！　もう中止にしちゃえよ、こんなモン！」

澪音　「泰介っ！」

腕を上げたまま澪音は泰介に向かって飛びかかろうとしたが、調がガッチリと澪音を抑えた。

泰介　「な、なんだよ、暴力女！　何か間違ったこと言ったか、オレ!?」

澪音が手を振り上げたことで、想定外の事態に泰介は焦っていた。

奥井　「泰介君。ボクは今の言葉、あまり感心できないなぁ」

泰介　「お、奥井先輩……」

奥井　「もう少しだけ待ってみようよ。それに今は道具作りに専念できるからいいじゃない。もちろん手伝ってくれるでしょ?」
泰介　「も、もちろんっす、奥井先輩!」
調　「ってことらしいから落ち着きな、澪音」
澪音　「う、うん。ゴメン、しべ」

澪音は調に掴まれていた腕を下ろした。

澪音　「それとごめんね、みちる。本当はみちるのシーンだけでも先に撮ろうかなって思ったんだけど、やっぱり優陽と演技の相談しながらの方がみちるもやりやすいかなって思って」

みちるはまだ完全に事態を把握していたわけではなかった。
だけど、優陽がなんらかの事情でしばらく部活に出られないことは理解することができていた。

みちる　「あ、いえ。私もその方が良いと思います」

部員全員の理解を得ることができた澪音は、少しだけ心が軽くなる。

調　「さてと。これであとは優陽の回復待ちだな」

澪音　「……うん」

だが、それがいつになるのか。

澪音と調は漠然とした不安を抱えたままだった。

◆教室

数日が経過し、木曜日の放課後。

澪音　「今日も優陽、帰っちゃったね」

調　「気持ちの整理に時間は掛かると思ったけど、こんなに時間が掛かるなんて優陽らしくないな」

長くてもせいぜい2、3日も過ぎれば、いつもの明るい優陽になると二人は信じていた。

小学生のころからずっと一緒にいた三人だったが、さすがに今回の優陽は少し異常だと思い始めていた。

澪音　「アクトレスになれないってショックは分かるけど……」

調　「全くだよ。自分が言い出した映画をこんな長い間放り投げるなんて、全く優陽らしくない」

澪音　「…………」

二人は今まで感じたことのない空気の重さを感じていた。
その時、一度教室を出ていた映研顧問の伊藤菜澄那が二人のもとにやって来た。

菜澄那　「草野さん」
澪音　「あ、はい」
菜澄那　「どう？　撮影は順調？」
澪音　「あ、は、はい。次のシーンが少し込み入っているので、今はその準備に追われています」
菜澄那　「そう。頑張ってね！」
澪音　「はい！　ありがとうございます」
ニコッと微笑むと、菜澄那は職員室へと戻った。
調　「……伊藤先生、完全に優陽のこと探ってきたな」

澪音　「え、そ、そうかな？」
調　「あぁ、私達だけで解決できそうか確認を込めて、な。今の澪音の反応で、まだ自分が出て行く時期ではないって判断したと思う」
澪音　「それなら良いけどさ……できればわたし達だけで解決したいもんね」
調　「そうだな」
調　（だけどこのままの状況が続くのもマズイし。どうしたものか）

◆教室

アクトレスの適性検査から1週間が経過しようとしていた。
今日は月に一度の土曜日授業の日。
状況は全く好転することなく、放課後になった。

優陽　「それじゃあ、またね……」

澪音　「あ、優陽、待って！」

優陽が教室のドアに手を掛けようとしたところで、澪音が呼び止めた。
そしてすかさず、優陽のもとへ駆け寄った。

優陽　「澪音ちゃん……」
澪音　「今日も帰るの？」
優陽　「…………」

優陽は俯いたまま、何も話さなかった。

澪音　「まだ、ダメ？」
優陽　「…………」

優しく語りかける澪音にも、優陽は無反応だった。

その時だった。
二人のやり取りを見ていた調が、机をバンと叩いた。
その音に、教室に残っていた生徒全員が調に注目する。
そして調は立ち上がり、二人のもとへツカツカと歩み寄った。

調　「なんで黙ったままなんだ、優陽！」

普段冷静な調に似つかわしくない大きな声に、優陽の体はビクッと震えた。

澪音　「しべ!?」
調　「いい加減にしな、優陽！　しばらくなにも言わずに見守っていたけど、さすがにこれ以上はワガママだ！」
優陽　「…………」

調　「部会でどれだけ澪音が優陽を庇っているのか、分かってるのか!?
　　伊藤先生に誤魔化している澪音の気持ち、分かってるのか、優陽っ！」

澪音「しべ、いいよ！　優陽だってツラいんだよ！」

大声でがなり立てる調を抑えるために、澪音も声が大きくなる。

調　「このままじゃ、澪音が部長の代で映画が完成しなくなるぞ！」

澪音「わたしのことは別にいいよ！　わたしよりよっぽど優陽の方が……」

調　「辛いって言うのか!?　そんな優陽を見守っているだけしかできない
　　澪音だって辛いのにか!?」

澪音「……っ!?」

澪音は自分が辛いことに気がついていなかった。
しかし、調の指摘によって、ようやく自分も辛かった事を認識してしまった。

澪音　「……ううっ」

澪音の目に涙が溜まる。
しかし、零れ落ちないように、澪音は涙を拭った。

調　「優陽もいい加減にしろよ！　辛いのは分かる。だけど、いい加減に諦めろよ！」

優陽　「とっくに諦めてるよ！　だけど、それだけじゃないんだよ‼」

優陽は初めて顔を上げた。
そして調を睨むと、負けないくらいの声量で反論した。

調　「それだけじゃないなら、一体なんなんだよ‼」

優陽　「しべちゃんには分からないよ、あたしの気持ちなんか！」

調　「あぁ、分からないね！　分かりたくもないよ‼」
澪音　「しべ！　それは言い過ぎだよ‼」
調　「……っ‼」

三人が三人とも熱くなった。
他の生徒達は気を遣ったのか、既に教室には三人以外は誰も残っていなかった。
その時、優陽のカバンに入っていたスマホからメッセージの着信音がピコッと鳴り響いた。
優陽は反射的にカバンに手を伸ばすが、ケンカの最中であったためすぐに手を下ろす。

調　「……いいよ、見れば？」

それまで激しい剣幕だった調だったが、空気を読んで手を下ろした優陽を見て少しだけ冷静さを取り戻した。
優陽はその許しに従い、スマホに届いたメッセージを確認する。

優陽　「……あ」

優陽は一言だけ声を漏らす。

優陽　「志保ちゃんから……」

優陽は顔を上げると、調と澪音にメッセージを見せるようにスマホをかざした。

志保　『元気？　わたし、今日そっち帰るんだけど、このあと会わない？　澪音や調も一緒にさ！』

土浦の高校に通っている一学年上の志保。
自宅から通うには少し遠いため、学校の寮に入っていた。

澪音　「志保先輩!?　今日、帰ってくるんだ！　わたし、会いたい！」

調　「…………」

優陽　「しべ、ちゃんは？」

覗き込むような優陽の目を、久しぶりにじっと見つめた調。
ふぅと大きくため息をつくと……

調　「……私も行くよ」

調はいつもの冷静さを取り戻した。

優陽　「うん。それじゃ、メッセージ返しとくね」

三人は久しぶりに一緒に下校した。
しかし、会話はほとんど無かった。

◆ショッピングセンター・フードコート

志保　「おー、来たか!!　こっちこっち！」

志保から件のショッピングセンター内のフードコートを指定されたので、三人は揃ってやってきた。
お昼を食べていないので本来は空腹のはずだったが、三人は複雑な感情でお腹一杯だった。

志保「お腹減っちゃったから、先に食べてるよ〜」

調「相変わらずマイペースですね」

調が挨拶代わりにガツガツと食べている志保にツッコミを入れる。

志保「調の毒舌も相変わらずだなー」

屈託のない笑顔で返す志保。
ただ、久しぶりに会う志保は明らかに垢抜けていた。
都会に出て洗練されたせいだろうか？
いや、もしかしたら『アクトレス』という希有な存在故かもしれないと、調は思った。
自分はアクトレスの適性検査で『適性アリ』という診断が下っただけ。
その後、正式なエミッション検査をクリアし、本試験、そして実技試験を合格した本物のアクトレスとは、纏っているオーラが違っていた。

少なくとも調にはそう感じられた。

志保「その一方でそっちの二人はなんか難しい顔してるなー」

澪音「あ、いえ、そんなことは……」

優陽「…………」

志保「特に優陽がそんな顔するのは珍しいな。いや、初めて見るぞ、優陽のそんな顔。どした?」

調「まぁ、色々とありまして……」

頬をポリポリと掻きながら応える調を見て、志保は思わず笑みがこぼれる。

志保（あはは。話を誤魔化そうとする時のクセ、治ってないな、調は）

このまま話を続けても生産性がないと思った志保は、話題を変えて別

角度から探ることにした。

志保「そう言えば菜澄那ちゃんに聞いたんだけど、今年はアクトレスの映画
を作るんだって？」

澪音「うっ……」

調「まぁ、そんなところです」

優陽「………」

志保「ふーん……」

見事な三者三様の態度に志保は思わず吹きそうになったが、なんとか
堪えて冷静に振る舞った。

でもニヤニヤとした少し意地悪な笑顔までは隠すことはできなかった。

志保「一応わたしもアクトレスやってるわけだし、聞きたいことがあればな
んでも聞いてよ」

三人　「「「…………」」」

話を振っても三人は黙ったままだった。

さすがの志保も少しイジワルをしすぎたと反省する。

志保　「とりあえずいきなり質問を受けるのもなんだし、先にアクトレスになったわたしの体験談とか語っちゃっていい？」

調　「あ、はい。ぜひ」

調の肯定を受けると、志保は一気に語り始めた。

志保　「実際、アクトレスになったはいいけど、想像していたよりもキツイってのが正直なところかなぁ。わたしってさ、ズケズケもの言うこと以外、取り柄ないじゃん？」

澪音　「そ、そんなことないと思います！　部長としての貫禄というか……部

員達をまとめる力は凄かったです！」

澪音は今の自分を去年の志保と比較して、部長としての力量の差を感じていた。

志保　「それはない！　実際、私が部長になったところで適当にやりすぎたから、まとまりのない映研だったしね。それは澪音の買いかぶり」

澪音　「そんなこと……」

志保　「まぁ、仮に澪音の言うとおりだとしても、そんな貫禄、アクトレスになったらなんの役にも立たないよ。相手はヴァイス。人間とは思考体系が全然違うしさ」

『ヴァイス』という言葉に、その時の三人は凄みを感じていた。

そして目の前のよく知る先輩が、敵対するその『ヴァイス』と戦っている事実を改めて実感し、その非日常感に飲み込まれたかのように刹

那的な浮遊感のようなものを覚えていた。
それは彼女らが作っているフィクションの世界とは明らかに違うリアリティだった。

一方の志保は特に気にする様子もなく、机に置いてあったドリンクのストローに口を付け、一口だけ飲み込んだ。
そして志保は天井を見ながら、アクトレスとして出撃したバトルを思い出していた。

志保　「今のところ、先輩の足を引っ張ることしかできてないなぁ。一流のアクトレスになると専用のギアを造って貰えるんだけど、そんなの夢のまた夢だよ、今んとこ」

調　「でも、志保さんならいつか専用ギアを貰えるくらい、凄いアクトレスになれますよ」

志保　「どうかなぁ。そうなればいいけどねぇ」
澪音　「志保先輩にしては珍しく弱気ですね？」
志保　「そりゃぁ、諦めずにいつまでもアクトレスを続けていれば手が届く日が来るかも……って思うけど、アクトレスって――」
優陽　「いつか辞めなくっちゃいけない……ずっとアクトレスのままじゃいられない……」
澪音・調　「「えっ！？」」

ずっと黙っていた優陽が突然言葉を発した事に驚く二人。
志保だけが優陽の言葉にニヤッと反応した。

志保　「そう、そういうこと。エミッション値はピークを過ぎると年々下がっていくからね。わたしが入った後でも引退した先輩がいるんだ」
優陽　「…………」
調　（……どうしたんだ、優陽？）

調は優陽の様子がいつもと違うことに気がついた。

調　（さっき優陽が言ったことが気になっていたけど……）

◆教室（回想）

優陽　『とっくに諦めてるよ！　だけど、それだけじゃないんだよ!!』

◆ショッピングセンター・フードコート

調　（優陽が言った『それだけじゃない』の意味……なんのことか分からなかったけど、アクトレスが引退することと何か関係があるのか？　それ以前にアクトレスになれない優陽が、なぜ？）

難しい顔をしている調に志保は気がついていた。

志保　「でも……」

志保は調の思考を遮るように話を続けた。

志保　「どんなに大変でも、上手くいかなくて辛くても、なんだかんだ人の役に立っているっていう嬉しさはあるんだよね。そっか、優陽がアクトレスに憧れていたのはこういうことなのかってさ」

優陽　「あ……」

優陽は志保の言葉に、何かを感じ取った。
それは、消えかけていたアクトレスへの想いを刺激するものだった。

志保　「さんざん優陽からアクトレスのいい話ばっかり聞いていたから辛いこ

とに面食らったりしたけど、優陽が憧れている理由もよく分かったよ」

優陽「志保ちゃん……」

優陽と志保は家が近所だということもあり、澪音や調よりも距離は近く、みちるを含めて姉妹のような関係性だった。

だから、志保は優陽からアクトレスへの想いを何度となく聞かされていた。

そして、その想いに応えるように志保がアクトレスの事業所に入った日には、三人でお祝いしたほどだった。

志保「まぁ、専用のギアを作って貰えるまでになれるかは分からないけどさ、頑張ってみるよ」

優陽「……ならさ！」

優陽の目が、かつてと同じように輝き始めた。

優陽　「あたしが志保ちゃんの専用ギア、創るよ！」

澪音・調　「「えっ!?」」

優陽はバンと机を叩きながら立ち上がった。

そして拳を握りながら宣言する。

優陽　「あたしはアクトレスになれなかったけど……専用ギアを創ることなら
できるかもしれないから！」

澪音　「優陽……」

調　「……フッ」

いつもの優陽が戻ってきたことで澪音と調の表情も和らぎ、それまで
漂っていた重たい空気が一気に吹き飛んでいった。

調　「いや、優陽には無理だ」

優陽「無理じゃないもん！　ギアを創るのにエミッション値は関係ないもん！」

調の否定をムキになって否定する優陽。

調　「いや、無理だよ。ギアの設計士になるなら勉強しないと。少なくとも今の優陽じゃ無理だ」

優陽「うぐっ！　一番痛いとこを突かれた‼」

あちゃーとばかりに、優陽は握っていた拳で頭を小突いた。

志保「あはは、調の言うとおりだね。だけど優陽がそのつもりなら、わたしはそれまでアクトレスを続けられるように頑張るさ」

優陽「うん！　絶対だからね！」
澪音「ううっ……」

元気を取り戻した優陽を見て、つい涙が流れてしまう澪音。

志保「おいおい、澪音。いつも強気なくせに、泣き虫なところは昔から全く変わらないな」
澪音「ううっ……ごめんなさい……うぅ……」
志保「いや、謝る所じゃないって」
志保（菜澄那ちゃんから頼まれて上手くまとめたつもりだったけど、澪音が泣くとは思わなかったな、あはは……）

それなりに計算通りに進めてきた会話だったが、志保にとっても想定外の出来事に苦笑いを浮かべるしか無かった。

優陽「ごめんね、澪音ちゃん、しべちゃん。あたし、もう大丈夫だよ」
澪音「……うん。遅れた分、早速明日からビシビシ行くからね！」
調「各方面への連絡は任せとけ。だから澪音は撮影プランの修正をよろしくな！」
志保「映画、楽しみにしてるよ、三人とも」
三人「「「はい！」」」

こうして再び霞ヶ浦の裏中学校映像研究部は動き出した。

◆学校の裏山

撮影を再開してから数日が経過した。

みちる「私、彼女のために何ができるんだろ……」

澪音　「カーットｌ!!」

みちるの演技に澪音の鋭い横やりが飛んでくる。

みちる　「うっ……」
澪音　「みちる！　もっと声を張って！」
みちる　「は、はい！」

背筋をピンと伸ばして応えるみちる。

泰介　「ったく、いつも同じ事言われて、懲りねーな！」
澪音　「泰介！　アンタはきちんとレフ板支えなさい！　何度同じ事言わせるの！」
泰介　「おーこわ」
奥井　「あはは」

見事なブーメランを受けた泰介に思わず笑ってしまう奥井。
草野姉弟の定番のやり取りはその場の雰囲気を和らげていた。
しかし、その輪の中に中々入れきれない娘が一人。

みちる　「うう……」

澪音の厳しい言葉も、自分を責めているものではないことは分かっている。
だけど、思うように演技が上達しない自分に、みちるはもどかしさを感じていた。
そんなみちるを気遣うように優陽が駆け寄り、優しく慰める。

優陽　「ちょっと声が小さかったけどさ、演技は凄く良くなったよ」
みちる　「ううん……わたしなんか全然ダメだよ……何回やってもうまくいかな

くて……」

みちるは相当落ち込んでいた。

演技力は確実に付いている。

もう少し自信を持つことができれば、みちるは一皮むけるかもしれない。

【選択肢】そんなみちるに優陽が掛けた言葉は？

《A 「今のみちるの演技でいい」とアドバイス》

《B 「せっかくだから役になりきろう」とアドバイス》